

## 支援のバトンを渡すため

立命館慶祥高校 普通科 SP コース 2年 曾我茉祐

平成30年9月6日午前3時8分、定期試験最中でその日の勉強を切り上げ、ベッドに入りウトウトしていた私は突然、今までに体験したことのない激しい揺れに見舞われた。

北海道胆振東部地震。震度7を記録した震源地はまさに私の住む町厚真町だった。クローゼットの扉が開き、寝ていたベッドの上に次々ものが落ちてくる。とっさに私は布団に潜り、暗闇の中揺れが収まるのを待った。棚からどんどん物が落ちてくる音、いつおさまるのかわからない揺れ。恐怖で声も出なかったその時間はとても長く感じられた。階下から父母の私の名前を呼ぶ声に我を取り戻し、階段を降りるとリビングは足の踏み場もないような惨状であった。冷蔵庫や食器棚が倒れそこから飛び出した茶わんやグラス、壁から落ちた時計のガラスの破片が床を覆いつくしていた。啞然とした。

その日から私の生活は一変し、テスト勉強どころではなくなった。電気も水もガスもない暮らしが始まる。父は地元の消防団に入っていたのでその日からすぐに行方不明者の捜索にあたり、家には母と私の二人きりとなった。一番大変だったのは水の確保だ。ご飯を炊くことも洗濯もできずもちろんトイレ、シャワーも使えない。家の片づけをしたくても掃除も手を洗うこともできなかった。近くの避難所に自衛隊が給水活動をしているのを防災無線で知り、母と二人、水管を持って水を汲みに給水所のある避難所と自宅を一日何往復もした。そこで水をもらうにも長蛇の列ができていた。食事は避難所に朝昼晩炊き出しをもらいに行き、お風呂は自衛隊が用意してくれた仮設風呂に入った。震災後何日かぶりに入る温かいお風呂でそれまでの緊張が一気にほぐれたのかそこで初めて自然と涙が出てきたのを覚えている。これまで地震や台風など日本ではたびたび大きな自然災害があったものの実際に自分の身に降りかかってくるとは夢にも思わなかった。初めてテレビで生まれ育った我が町の惨状を知ったときその変わりように愕然とし、現実を突きつけられ胸が苦しくなった。

被災者となった私はたくさんの人の暖かい支援に助けられた。震災当日の朝から「災害派遣」の横断幕をかかげた自衛隊車両、道内各地の市町村や災害協定を結んでいる東北六県からの消防車両・警察車両が応援ためにかけつけ、家の前で列をなしていた。心細さの中にいた私にその光景は何とも言えない安堵感をもたらした。そして多くの民間ボランティアも町にやってきた。炊き出し・給水・医療、災害ごみの仕分けや住宅の片づけ、支援物資の仕分け、高齢者の入浴介助、休校のため学校に行けない子供の学習ボランティア、様々な支援をして頂いた。私の友達も町外から駆け付けボランティアに参加してくれた。持病を持つ私の父は食事制限があり、支給されるお弁当や炊き出しを食べることができなかったため家で調理ができない母は大変困っていた。避難所の掲示板で管理栄養士のボランティアがあるのを知り母が連絡をしたところすぐに制限食に対応したレトルト品や缶詰をもって札幌から駆けつけ、又栄養相談にも親身になって応じてくれた。不安の中にいた父も母もその緊急時の対応の速さに驚き、大変感謝していた。

一口にボランティアといっても様々な活動があることを知った。

人は人に救われる。私はこの震災で受けた多くの心温まる支援に触れるうち、自分も困っている人たちに対し「何か手助けがしたい」、「こんな未熟な私でも何か人の役に立てることがあるかもしれない」「今回受けたこの恩をどこかで社会に返したい」と思うようになった。がしかし、いざ何か行動しようと思ってもこれといった特技も資格もない私は自分に何ができるかわからずその一歩を踏み出せずにいる。そこでボランティアや慈善活動が盛んなアメリカでその実情を詳しく知りたいと思った。アメリカに住む人々は小さなころから学校や社会の中でそのような活動に深くかか

わり生活の一部ともいわれるほど身近なものだと聞いたことがある。アメリカがボランティア大国といわれる所以、そしてその活動に対する意識やライフスタイルの中での位置づけや動機また実際どのような活動があるのかを知り、機会があれば自分自身も実際にその活動にかかわりたいと思った。

私はこの被災体験をただつらく、悲しいものだけにはしたくない。この経験で知り得た地震の怖さ、被災者の気持ち、人のやさしさや復興に立ち向かう人の強さ、体験しなければわからなかったことがたくさんある。この経験を活かしアメリカに住む人々のそのボランティア精神に触れ自分の可能性を探したい。そして今回の震災で多くの人から渡された「支援」というバトンを今度は私が必要とする人に渡したい。そうすることが私を助けてくれた方々に対しての恩返しになると思うから。